九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 「会話の含意」をめぐって

大江, 三郎

https://doi.org/10.15017/2332733

出版情報：文學研究. 72, pp.1-14, 1975-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

# 「会話の含意」をめぐって

大　江　三　郎

**1．この論文の目的**　Oxford の哲学者 H. P. Grice の会話の含意 (conversational implicature) の理論は，文法の理論を超える，言語による伝達 (linguistic communication) の理論への初の試みということができる[1]．以下の論は，この概念を分析し，関係するいくつかの問題点を指摘し，これについての将来の研究の方向づけをすることを目的とする．

**2．協力の原理と会話の含意**　次の(1)は Grice が会話の含意を説明するために提出した例である．

(1)　My wife is either in the kitchen or in the bedroom.

彼によると，この文は通常，話し手が妻がどちらの部屋にいるか知らない (I do not know which of the rooms my wife is in.) ということを含意する．そして背後にあって含意を支えるのが，合話における協力の原理 (cooperative principle) である．これは，会話は，それに参加するものが互いにその目的を達成することをめざして貢献するような協力的な行為であるとするもので，この原理に連結する原則 (maxims) として次の四つがあげられる．

(2) a．量の原則：　会話に対してなされる貢献は会話場面において必要とされるだけの情報量をもつものでなければならない．情報量が多すぎてもいけないし，少なすぎてもいけない．

b．質の原則：　会話に対して真の貢献をなすよう努めねばならない．

c．関係性の原則：　会話に対して関係性を有する貢献をせねばならない．（無関係なことをしてはならない．）[2]

c．仕方の原則：漠然性，あいまい性などの結果，混乱を作り出すよ

うなことは避け，明晰で簡潔であるよう努めねばならない．

(1)の文がなぜ上に述べたように I do not know which of the rooms my wife is in. を含意するようになるかは次のように説明される．選言を構成する項（A or B におけるAとB）は，選言そのものより多くの情報を有する．上の（2a）の原則によって，人は十分な理由がないのに可能なだけの情報量を有する言明をしないはずがない．従って，(1)をいう人は，協力の原則を守る限り，それ以上の情報量を有する，より強い言明(My wife is in the kitchen. あるいは My wife is in the bedroom.)をしない十分な理由があるはずである．その理由とは，その人が上の(2b)の原則「質の原則」に違反することなしにはより強い言明をすることができないということである．このように，会話の含意とは話し手の言明から，彼が協力の原則を守るという仮定に立って我々が推論によって得る事柄である．

なお，(2a）の「会話場面において必要とされるだけの情報量をもつ」ということは次の(3)を考えると理解できる．(3)の文はいずれも「彼」という同一人物の現在の住所を伝えるものである．

(3) a. He lives in Japan.

b. He lives in Tokyo.

c. He lives in Shibuya.

d. He lives near the Meiji Shrine.

上の文はaからdへ進むほど限定的で，(会話場面や聞き手を考慮に入れなければ）情報量は豊かになるといえる．しかし，たとえばアメリカの片いなかで，彼の住むその地域以外の地域についての知識に乏しい聞き手に向って話す場合，c,d はもとよりbさえも口にすることは実質的な情報を与えることにはならないであろう．このような場合，会話場面において必要とされるだけの情報量をもつのは，まず（3a）であろう．

**3．会話の含意と前提の区別**　会話の含意は前提（presupposition）と混同されることがあるようである．Chomsky[3]は，変形生成文法で前

提の議論が紛糾しているのは様々な内容のものが十分明確に区別されることなしに前提と呼ばれているからだといい，その例として次の文をあげる．

(4) Two of my five childeren are in elementary school.

彼によるとこの文は（5a）の内容を前提にするが，またこれと非常に違う意味で（5b）を前提にするともいえる．

(5) a. I have five children.

b. Three of my five children are not in elementary school.

しかし，（5b）は Chomsky 自身いうように Grice のいわゆる会話の含意の例であり，これを前提の一種とみなすのは適当でない．前提と会話の含意とは次の点で区別されると思われる．前提は話し手が，主張する事柄の成立のための条件として立てるもので，話し手の聞き手に対する伝達内容の一部になっており，聞き手も伝達内容の一部として受取る．これに対して上にみたように会話の含意は，聞き手が，協力の原理にもとづいて話し手の主張することから推論によって獲得する内容である．

(4)の文の二つの前提と Chomsky が呼ぶ（5a）と（5b）の，前提としての質の違いを，彼は（5a）が成立しなければ(4)の真理値はなくなるが，(5b）が成立しなくても(4)の文の真理値はなくなりはしないというふうに説明する．前提の不成立が文の真理値欠如に導くという立場を彼がとる以上，彼が指摘する上述の（5b）と(4)との関係だけからでも彼は（5b）を(4)の前提とみなすことができなくなるはずである．[4]

**4．会話の含意とそれに対する話し手の態度**　前節でみたように，Chomsky は彼の立場からは不可能であるにもかかわらず．（5b）を(4)の前提とみなすという矛盾を犯している．ところが，彼は（5b）の不成立が(4)の真理値欠如に導かないという主張を裏づけるために次の(6)がいえるという事実をあげている．

(6) * Two of my five children are in elementary school, and so are the other three.

しかし(6)は奇妙な文である．* はそのことを示す．この文は変形文法のい

う「非文法的な」文ではないであろう．しかしだからといって，彼が文法についての議論の根拠としてこのような文法的ではあるが不自然な文を用いてよいとは私には思えない．本節と§5の末尾に述べるように，文の自然さも人間に普遍的な内的プログラム，人間の能力に依存するからである．(6)が奇妙に感じられるのは次の理由による．(6)は結局(7)を主張する．

(7) All of my five children are in elementary school.

しかしそれなら(6)におけるように5人をわざわざ2人と3人に分けて主張するいわれはないのである．(6)を図式的に $S_1$ and $S_2$ と表わせば，$S_1$ の主張は明らかに場面で必要とされる情報としては不十分で，(2a)の「量の原則」に違反する．またわざわざ(7)を避けて(6)の $S_1$ and $S_2$ の方式をとることは，(2d)の「仕方の原則」に違反するとみられよう．話し手が協力の原則に従う限り，(4)の文は必ず(5b)を含意する．それは(1)がその含意を必然的に有するのと同じである．

ところで，(4)の two の前に（指さしていう）those という限定辞を挿入した(8)の文は必ずしも(5b)のような含意を有するとはいえない．（以下で指摘するように，実際には「このような含意を有することがない」というべきかもしれない．）

(8) Those two of my five children are in elementary school.

これは(9)が自然な文であることからも明らかであろう．

(9) Those two of my five children are in elementary school, and so are the other three.

those の使用からいって，ここでの「2人の私の子供」は話し手，聞き手両者にとって特定化され，他の3人の子供からはっきり分離されたものになっているので，他の3人と無関係に，それのみについて主張を行うことは決して情報不足の誤りを犯すこと（(2a)の違反）ではない．そして他の3人に関する事柄はそれによって必然的には含意されなくなる．

次に，(4)の my を第三者の his に変えた文(10)は，会話の含意に関して(4)と同様であるようにみえる．

(10) Two of his five children are in elementary school.

(11)は(6)と同じ程度奇妙に響く.

(11) *Two of his five children are in elementary school, and so are the other three.

しかし，(12)のａ．ｂは(10)のひきのばし文としてともに可能である.

(12) a. Two of his five children are in elementary school, but the other three are not.

b. Two of his five children are in elementary school, but, as for the other three, I do not know whether they are in elementary school or not.

(12a) は but 以下に，予想される(10)の会話の含意を明示する文脈を有する．ところが (12b) の but 以下は，この予想される含意を否定はしないまでも積極的に支持はしないような文脈である．ある文ｐがある文ｑを会話の含意としてもつか否かが，ｐが－ｑ（ｑの否定）を伴うことがないかあるかにかかっているという推測が正しいとすると，(10)が会話の含意として The other three are not in elementary school. をもつということに支障はないが(8)はそのような会話の含意をもたないということになる.

会話の含意に対する話し手の態度に関して(10)が(4)と異ることは，(4)のパラレルなひきのばし文である(13)のａがよく，ｂが不自然に響くことからも明らかであろう.

(13) a. Two of my five children are in elementary school, but the other three are not.

b. *Two of my five children are in elementary school, but, as for the other three, I do not know whether they are in elementary school or not.

(12b) が自然で (13b) が不自然なのはなぜかは容易に理解される.「人は自分自身の子供に関する重要な消息について知っているのが当然であるが，他人の子供の消息について知らないことは十分あり得る」というのは

すべての人間に共通した世界についての知識，信念である．聞き手はこの信念にもとづいて，話し手の言明から推論する．上の「重要な消息」の範囲，「他人」の範囲は人によって変動するであろう．たとえば，(13b) の in elementary school を taller than I に変えた文を自然と感ずる人は多いであろうし，また，(12b) の his が my brother's である場合，この文はいくぶん不自然と判断されることがあろう．(聞き手の) 言語外的な信念が会話の含意に対する話し手の態度の解釈の一要件であることが分る．

(1)のような選言構文についても対応する例を示すことができる．

(14) a. *I am either a typist or a stenographer.

b. ? My sister is either a typist or a stenographer.

c. John's sister is either a typist or a stenographer.

(14a) は非常に特殊な場合，たとえばすぐあとに Which do you think I am ? がつづくような場合を除いて，まずあり得ない文である．(14b) も一般にいくぶん不自然な文と感じられるであろう．理由は明瞭である．(14)の文は I do not know whether —— a typist or a stenographer. の空所が a, b, cに応じて I am, my sister is, John's sister is によってみたされるような文を含意する．この含意は一般的な信念に照らして a では明らかにおかしく，c では全く問題ない．b はその中間といえる．(14a) が不自然なのはその会話の含意と一般的な信念とが矛盾するからであり，(14a) は例外的な場合以外では常に不自然なのであるから，この会話の含意はこの文に常に付随するといえそうである．(上述の，Which do you think I am ? がすぐあとにつづくような例外的な場合には，この質問のおかげで，話し手が十分な情報を与えない理由があることが聞き手に明らかとなる．従ってこの場合には I do not know whether I am a typist or a stenographer. という，信念と矛盾する含意は存在しない．)

以上から，試問を伴う (14a) のような例外的場合を除いて一般に，ある発話環境（文の型）は特定の含意を常に有する．含意を時に有し，時に

有さないというような ことはないのではないかと 私は考える．（そうすると「常に」とか「必然的に」とかいう制限句は含意に関してはそもそも不要になろう．）この型の文は会話の含意を明示する文，それを積極的には支持しないという話し手の態度を明示する文を伴うことはあっても，それをはっきり否定するような文を伴うことはできないと思われる．

これまでは文強勢の問題を無視してきたが，これを考慮に入れると会話の含意についての話し手の態度の解釈も精密化される．たとえば，⑽の文は two に焦点の位置を示す文強勢が置かれるか否かで意味が違う．そしてこの違いが会話の含意に対する話し手の態度の違いにつながることは，⒂と⒃を比較すれば明らかである．

(15) Twó of his five children are in elementary school, but

{ (a) the other three are not.
(b) *as for the other three, I do not know whether they are in elementary school or not. }

(16) Twŏ of his five children are in elementary school, but

{ (a) the other three are not.
(b) as for the other three, I do not know whether they are in elementary school or not. }

⒂において，but の前の文は Some of his five children are in elementary school. を前提にし，Those of his five children who are in elementary school are two (in number). が主張される[5]．このように two に焦点が置かれ，「小学校に行っている」のがこの2人であることが主張される以上，この two は the other three から話し手によってはつきり区別されていることになり，The other three are not in elementary school. という含意は話し手にとって疑いの余地のないものとなる．(15b) はこのことと矛盾するので奇妙に感じられるのである．もちろん⒂の but の前の文の in elementary school の前に certainly のような副詞が入れば (b) もよくなる．これに対して，(16) の but の

前の文では上述の前提はなく，two が the other three から明瞭に区別されてはいないから，(a) (b) ともに可能なひきのばしであり得る．(4)の文も two に文強勢が置かれるか否かに応じて，前提に関する違いを有するようになる．しかし，(4)の場合には前に述べた「自分自身の子供の消息の知識についての信念」のおかげで，two の文強勢の有無にかかわらず (b) 型のひきのばしは不可能である．

**5．話し手，聞き手，コンテクスト**　前節で会話の含意に対する話し手の態度を問題にしたことからいっても，§3以来考えてきたように，会話の含意は聞き手が話し手の言明から協力の原則にもとづいて推論によって獲得するとのみはいえなくなることは明らかである．話し手も自らの言明から推論によって含意を獲得しているといわねばならない．前述の世界についての知識や信念も，話し手と聞き手に共有されるものとして会話の中で役割を演ずる．これは，会話場面で同一人物が話し手にも聞き手にもなることを考えれば至極当然のことである．ここに述べていることは結局，協力的な行為としての会話の原理の一部となるものであろう．

前提は，これまで話し手が聞き手に対する情報に含めるものとされてきたが，ここにも聞き手の役割がないわけでは決してない．ここで，前提の語用論的な，あるいは運用的といえるかもしれないような側面についての Lakoff[6] と Chomsky[7] のいくぶんくいちがう意見を比較検討することは有益であろう．Lakoff によるとたとえば次の(17)の文 (she と him とに対比強勢がある) は彼を含むある人々には文法的な (well-formed(ness) の訳語としてここでは「文法的な」「文法性」を用いる) 文だと判断されるが，異る信念を有する人は文法性に関して違った判断をするであろう．

(17) John called Mary a Republican and then shé insulted hím.

Lakoff がここでいう信念（前提）とは To call someone a Republican is to insult him. という話し手の信念である．しかしChomsky は，事情はもっと複雑でありこの文の文法性についての判断は話し手だけでなく John および Mary の信念にも依存するという．ある人がある別

の人をほめるつもりでいったことが，その相手の人の信念次第ではその人を侮辱することになる場合や，その逆の場合はよくある．この点を理解することは確かに重要であるが，しかしよく考えると事態は Chomsky が考えているよりもさらにもう少し複雑である．人が相手の反応を正しく捉えず，所期の行為を遂行したと思っている場合があるからである．たとえばほめるつもりでいったことで相手が侮辱を感じたという事実を把握せず，ほめる行為を遂行したと信じている場合である．結局，Chomsky のいう，(17)の文で問題になる「John および Mary の信念」とは，「話し手が John および Mary の信念と信ずるもの」である．(17)を文法的だと判断し，発話する人（話し手）は，For John to call Mary a Republican is for him to insult her. と For Mary to call John a Republican is for her to insult him. とがともに John と Mary の信念であるということを前提にしている．そしておそらく上に述べた To call someone a Republican is to insult him. という信念を話し手がもっている，あるいはこれと矛盾する信念 To call someone a Republican is to praise him. を彼がもっていないことが必要であろう．(17)の John または Mary が Barry Goldwater のような根っからの共和党員の名前に変えられた文は Lakoff のような信念を有する人でも文法的とは判断しないであろうという Chomsky の見解も無条件では受入れられない．このような文として(18)をみよう．

(18) Mary called Mr. Barry Goldwater a Republican and then hé insulted hér.

(18)は，常識的にはあまりあり得ないことだが Goldwater が Mary 同様民主党員だと信じている人，あるいは「(民主党支持の) 中古車販売業者 Barry Goldwater」について述べている人にとっては文法的な文であり得る．ところで，前提が結局は話し手の前提であるという上の説明はまだ不十分である．「自分の信念は聞き手によって受入れられる，少くとも否定されることはない」という信念を話し手は有していなければならない．

会話が協力的な行為であり，前提が話し手の情報の一部である以上，前提に対する聞き手のかかわり方が考慮されるのは当然なことである．ただしChomsky の理論もこのような語用論的要因を問題にすべきだなどと私は主張しているのではない。

前提が聞き手にとって奇異なものであるかもしれないという懸念を話し手がもつ時，つまり，それが一般の人々がもつ信念からずれると話し手が判断する時，そのような前提は言語的な文脈によって明示されることになる．たとえば(17)の前提が一般的な信念からずれると話し手が判断すれば，彼は(19)におけるように明示的な文脈（下線部）を利用するであろう。

(19) John called Mary a Republican and then shé insulted hím <u>Actually they are both progressive Democrats.</u>

また，Mr. Barry Goldwater が共和党の政治家でなく民主党支持の中古車販売業者だというのは明らかに一般的な信念からずれるから，その場合，(18)の代りに明示的な文脈（下線部）を有する(20)のようなものが用いられるであろう．

(20) Mr. Barry Goldwater, <u>a used-car dealer who hates the Republican Party,</u> was called a Republican by Mary, and then shé was insulted by hím.

(20)は指示（reference）が前提を含み得ることを示すもので，興味深い[8]．

協力の原則はこれまで，それ独自で作用するかのように述べてきたが，実はそうではない．事実（2a）の「量の原則」では，「会話場面において必要とされるだけの情報量」というふうに，会話場面（それに聞き手）の把握の必要が明示されている．これは他の協力の原則でも実は同じである．このような要因が協力の原則と常に連合する，あるいは協力の原則の不可欠な部分である．またpをいうことによってqが含意されるためには概略，次の四つの条件が必要だといわれる．

① 話し手が協力の原則を守っていると想定され得る．

② 話し手がqを考えているのでなければ彼は協力の原則を守っていると

は想定され得ないと他の人々には思われると，話し手，聞き手ともに考えている．

③　話し手がqを考えていると聞き手が考えるべきではないということを示すようなことを話し手は何もしていない．

④　聞き手が自分自身で以上のことすべてを了解することが当然期待され得ると話し手が信じている[9]．

ここでは，場面の知覚，それを可能にする話し手，聞き手の内蔵する知覚装置，話し手・聞き手の共通した信念，などが連合的に働いていることは明らかである．

これまで述べてきた世界についての知識や信念，知覚装置は，話し手・聞き手(言語使用者)が精神内部に貯えるもの，内的プログラムということができる．この内的プログラムのあるものは個々の言語を支える文化に固有であるか，あるいはさらに個人的，私的なものであるが，多くのものは普遍的であると推測される．会話における協力の原則もこの言語使用者の内的プログラム，おそらくは普遍的な内的プログラムといえよう．(これに関連して，ここで考察した現象は，対応する日本語の発話にもそのままあてはまるということは興味深い．）言語使用者の内的プログラム，それをとおして生ずる場面の知覚内容を包括してコンテクストと呼ぶことにする．そうするとここで取上げた協力の原則にもとづく会話の含意は，「ある発話があるコンテクストにおいて獲得する推論的意味」の一例とみることができる．このような推論的意味の別の場合として(21)(22)にみられるような，発話内行為の力（illocutionary force）の変動があげられよう．

(21) I'll come to the orgy.

(22) It's stuffy in here.

(21)は場合に応じて「予言」「約束」「警告」などを表わし得るし，(22)は陳述とも命令（たとえば，Open the window.）ともなり得る．従って，このような広いわくぐみの中で会話の含意を扱おうとするGordon-Lakoffの試み[10]は正しい研究の方向を示唆しているということができる．

**6．まとめ——研究の方向**　会話の含意を明らかにすることは文法の理論を超えた，「言語使用」「伝達」の理論を開拓することで多くの困難がからむが，可能な研究の方向には次のようなものが含まれるであろう．

① いかなる発話についても会話の含意があるというわけではなく，会話の含意が生ずるための一定の「発話環境」があるらしい．たとえば(1)は選言構文，(4)などは，「全体のうちの部分」を表わす表現が主語であるような文である．また，逆に発話環境に応じて含意のタイプもきまってくるようである．この方面での規則性を究明する必要がある．

② 会話の含意の解釈，それへの態度をきめる内的プログラムとして話し手，聞き手が精神内に有する協力の原理，信念体系，知覚戦略などを可能な限り明らかにする必要がある．

③ 会話の含意と前提とはいかにして区別されるかを明確にすべきである．両者の区別は予想されるほど容易ではない．それは，結局会話における話し手と聞き手の役割が明確に区別され得ないことから来ている．

④ 会話の含意がその一例であるようなコンテクストにおける推論的意味の記述方法を確立する必要がある．

**注**

1) Grice の理論についてはほとんど Katz による紹介［Jerrold J. Katz, Semantic Theory, (Harper & Row, 1972), pp. 444—450］に依存する．

2) 四つの原則のうち．a, b, d については本論文中に適用の具体例が示されるが，cのみは示されない．「関係性の原則」に違反する行為とは，場面に全く要求されていないような無関係な発話をすること，たとえば現在の時刻が聞き手には十分分っている場面，あるいは聞き手がそれについての情報を全く求めていないことが明らかであるような場面で，It's nine o'clock now. という発話をすることである．

3) Noam Chomsky, "Some Empirical Issues in the Theory of Transformational Grammar," *Studies on Semantics in Generative Grammar*, (Mouton, 1972), pp. 189—190.

4) 「前提の不成立（presupposition failure）の結果」は，前提というものをどう捉えるかの重要な要因である．Richard Garner［" 'Presupposition' in Philos-

ophy and Linguistics," *Studies in Linguistic Semantics*, edited by C. J. Fillmore and D. T. Langendoen, (Holt, 1971), pp. 23—44] は，この，前提の不成立の結果と，x presupposes y. における $x$ の値と $y$ の値という三つの要因によって，Frege, Strawson, Sellars の前提の捉え方を比較，提示している．Chomsky のように前提の不成立の結果言明が真理値を欠くとするのは Strawson である．ただし Strawson は「文の前提」を云々することはない．Sellars はその前提が不成立であるような言明をする人（前提される存在言明が真であると信じないで主張をするような人）は不正確に話す（speak incorrectly）という．これに対して Strawson は，このような会話の語用論的特徴は彼自身の前提の概念とは無関係だという（Garnerの論文 pp. 32—33）．しかし語用論的見方と論理的見方とをはっさり区別してさえいれば，前提を語用論的に見る立場もあってよい．そうでなければ語用論的な概念である会話の含意との比較はできない．この論文の本節以下で問題にされる前提は話し手，聞き手の立場と密接に結びついた極めて語用論的性格の強いものである．

5) 焦点と前提が文の表層構造（イントネーション）の解釈に依存するという考えについては，Noam Chomsky, "Deep Structure, Surface Structure, and Semantic Interpretation," *Studies on Semantics in Generative Grammar*, pp. 88—103 参照．

6) George Lakoff, "Presupposition and Relative Well-formedness," *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics, and Psychology*, edited by D. D, Steinberg & L. A. Jakobovits, (Cambridge University Press, 1971), pp. 329—340.

7) Noam Chomsky, "Some Empirical Issues in the Theory of Transformational Grammar," pp. 120—122.

8) Katz, *Semantic Theory*, p. 449 にある Richard M. Nixon steals candy from babies. という文についての彼のコメントを参照．

9) Katz, *Semantic Theory*, p. 448.

10) David Gordon and George Lakoff, "Conversational Postulates," *Papers fom the 7th Regional Meeting of Chicago Linguistic Society*, (1971), pp. 63—84.

Chomsky ("Some Empirical Issues," pp. 192—194) は，May I have the ashtray? May I be examined by Dr. X? のような May I で始まる疑問文が常に要請を表わすといい，この要請の意味解釈が may の疑問文では表層構造における主語の人称に依存するという．しかし May I…？ 型の疑問文では質問と要請の間で発話内行為の力の変動がある．要請の意味はコンテクストによるもので，これを文法の意味解釈部門で処理できるとするのは，(21)や(22)のような文

のコンテクストによる様々な意味を同様に処理できると主張するのにほとんど同じで，誤りである．